「玄関後退」型住宅成立に伴う屋根形式および住宅外観の変容過程

—金沢市におけるケース・スタディ No.7—

STUDY ON THE MORPHOLOGY OF THE EXTERNAL APPEARANCE OF THE
TRADITIONAL TOWN HOUSING IN THE BUILT-UP AREA WHERE
LOWER SAMURAI CLASSES HAD INHABITED IN THE EDO ERA.

—Case study in Kanazawa city, Part 7—

玉置伸悟*, 増田達男**

Shingo TAMAKI and Tatsuo MASUTA

In this paper, the external appearance of the traditional town housing and its evolution processes are analyzed, conclusions are as follows,

1. The main roof style of the housing type with the receding entrance (Genkan-kotai type) had been developing from the saddle roof to the saddle with the pent roof ("Irimoya").
2. The roof of the kitchen transformed from the lean-to roof to the saddle roof, as the kitchen had been projecting from the main structure.
3. The roof style of the vestibule had developed from the lean-to roof to the saddle with the pent roof.
4. The morphological development of the external appearance of the traditional town housing had been motivated by the resident's aspiration for keeping his status.

Keywords : external appearance, roof style, evolution process, traditional town house

はじめに

一連の本研究^{注1)}において旧武士居住地における昭和戦前期までの^{注2)}代表的住宅型であった「玄関後退」型住宅の成立について、主として次の点を明らかにした。

1. 明治後期からはじまる「玄関後退」型は旧下級武士居住地における「玄関」型を祖型として成立した。
2. 「玄関後退」型は、正式のザシキを確保するための住宅の2階建て化を直接の動機として発生した。
3. 玄関の後退は住宅の2階化の過程で必要になった階段を「玄関」型における「小間」の位置に設け、その結果、玄関回りを整理したことに起因している。
4. 一方、ナガシの張り出しは、住宅間口の縮小化過程に対応しつつ、かつチャノマおよびナガシ面積を確保しようとする必然的結果として生み出された。

以上は、主としてデータの統計的処理と住宅平面上の分析から実証したものであった。

本稿では、1節では主屋と下屋に関連して屋根形式および構造面について、2節では住宅前部のナガシとゲンカンの屋根形式について分析することを通し、「玄関後退」型成立に伴う住宅外観上の変容を明らかにする。3

節では、前稿までにおいて触れることのなかった昭和戦前期までの具体的な住まい方について、若干の補充調査結果を「補遺」として紹介することにより、「玄関後退」型成立の直接の契機となった2階建て化の要因を分析・補強している。

最後に、改めて「玄関後退」型成立の意味を整理することにより、一連の本研究を結んでいる。

1. 屋根形式とその変容

本節では、前稿までに述べてきた住宅前部の変容と主屋の屋根形式との関連について検討する。

表一1は、時期別・間口別に屋根形式を集計したものである。全体を通してみると平入りと妻入り（入母屋を含む）がほぼ半ばしているが、大正期から昭和戦前期にかけて平入りが漸減する傾向がわずかに認められる。

しかし、これを間口別にみると明瞭な特徴が認められる。間口を3間以下の小間口と3.5間以上の相対的に大間口に分けてみると、小間口の場合は64.4%は平入りであるが、3.5間以上になると28.9%と激減する。またこれを時期別にみると、3間以下の小間口の場合、明

* 福井大学 教授・工博

** 金沢工業大学 講師・工修

Fukui Univ., Prof. Dr. Eng.

Kanazawa Institute of Technology, Lecturer, M. Eng.

表一 主屋の屋根形式の変遷

住宅平面型		「玄関」型						「玄関後退」型						合 計									
住宅間口		2	2.5	3	3.5	4	4.5	計	2	2.5	3	3.5	4	4.5	計	2	2.5	3	3.5	4	4.5	計	
明治期	平入	1	3	2	3	4	3	16	1	1	1	1			4	1	4	3	4	5	3	20	
	妻入		1	1	2	5	5	14					3	1	4	1	1	2	8	6	18		
	入母屋													1	1						1	1	
計		1	4	3	5	9	8	30	1	1	1	4	2	9	1	5	4	6	13	10	39		
大正期	平入			3	4	1	1	1	10		4	4		1	1	10		7	8	1	2	2	20
	妻入			1	1	1		3		4	1	3	3	1	12		4	2	4	4	1	15	
	入母屋						1	1			1	1	1	3	3		1		1	2	4	15	
計			3	5	2	2	2	14		8	6	3	5	3	25		11	11	5	7	5	39	
昭和戦前期	平入	1	5	5	2	1		14	15	9	2	4			30	1	20	14	4	5		44	
	妻入		4	1	1		6	16	6	5	5	9	5		30	10	5	6	10	5		36	
	入母屋		1	3	1	1	1	7			4	6	4	1	15		1	7	7	5	2	22	
計		1	10	8	4	3	1	27	21	18	13	17	6	75	1	31	26	17	20	7	102		
合計	平入	2	11	11	6	6	4	40	20	14	3	6	1	44	2	31	25	9	12	5	84		
	妻入	5	2	4	7	5	23	23	10	6	8	15	7	46	15	8	12	22	12	6	69		
	入母屋	1	3	1	1	2	8	8		5	6	5	3	19	1	8	7	6	5		27		
計		2	17	16	11	14	11	71	30	25	17	26	11	109	2	47	41	28	40	22	180		

治期においては8/10=80%が平入りであるが、大正期では15/22=68%，昭和戦前期では35/55=60%と平入りは減少する。同様に3.5間間口以上においても明治期の12/29=41%，ついで5/17=29%，9/40=20%と減少する。

すなわち、旧武士居住地においては平入りと妻入りが相半ばしているように見えるが、小間口住宅の場合は建てづまりと関連して平入りが多く、かつ時代の経過の中で小間口住宅が増加してきたために平入りの絶対数は多くなる。しかしそれにもかかわらず、小間口住宅においても経年的に平入りの比率が減少し、妻入り化が進んできたことを示している。

一方、3.5間間口以上についてみると、明治期においては17/29=59%が妻入り（入母屋を含む）であった。それが大正期になると12/17=71%となり、昭和戦前期では35/44=80%と相対的に大間口住宅の場合、もともと妻入りが多かったものが時代の経過の中でさらに妻入り化が進んできたことを示している。

住宅型別には、明治期主流であった「玄関」型においては、平入り、妻入りが半ばしており、3.5間間口以上に限っても平入りが10/22=45%，妻入りが12/22=55%と大差ない。

これが大正期になると、当時台頭してきた「玄関後退」型の場合、3.5間間口以上では妻入りが9/11=82%を占め、昭和戦前期は30/36=83%を示している。3間間口以下の場合でも妻入りは、大正期で6/14=43%，昭和戦前期は15/38=40%といずれも4割程度を占めている。

このように妻入り化は、「玄関後退」型の台頭とより関連して現象してきている。

さらに注目される現象として主屋屋根の入母屋化がある。妻入りの中で、切妻屋根から入母屋屋根の変化は大正期頃より現われ、昭和戦前期では22/102=22%に達するようになる。中でも3.5間間口以上に限ると14/44=32%と約1/3は入母屋住宅となる。すなわち屋根形式においても、時代を追うごとに格式性をもつ意匠が好

まれるようになってきたことを示しているといえよう。

なお、金沢市（前田藩）における旧武士階層の住宅は一般的には妻入り形式であった^{注3)}。しかしながら現存する足軽住宅の遺構は妻入り形式と平入り形式に、地域によって明確に2分されており^{注4)}、足軽間の身分上の差異が現れているものと推察される。

以上の主屋屋根形状における全体的傾向を背景として、次に、明治初期の代表的タイプである「玄関」型の「2・2・2構成」について、主屋の屋根とゲンカンおよびナガシ部分の屋根の関係を検討する。

主屋が妻入り形式の場合は、図一1の立体図に示すように、前方に1.5間の下屋として張り出した形態をとる（写真一1参照）。この前面下屋には、モデル平面図一2

図一1 立体図・「玄関」型 平屋・妻入り

写真一1 「玄関」型・平屋・妻入り形式

図二 「玄関」型および「玄関後退」型・「2・2・2構成」における「ドマ」と上げ床の関係

からも明らかなように、ゲンカン、ナガシおよび便所が含まれる。すなわち、本来的には“ドマ”で構成されていた設備・サービスの空間は下屋、一方、上げ床部分であった居住室空間は主屋と、明確に分節されている。

一方、主屋が平入り形式の場合は、図-3の立体図に示すように前部のゲンカン・ナガシ・便所も大屋根の下に組み込まれ、外観上、下屋は現れない(写真-2参照)。しかしながら、実際に小屋組を内部から仰ぎ見ると(図-4参照)、奥行方向への主要な梁(ノボリ梁^{注5)})は居住室部のみに架構されている。すなわち身舎梁間は図-2における上げ床部分のみであり、ナガシ等(図-2における“ドマ”部分)の上部は主屋屋根の延長線上には

図-3 立体図・「玄関」型 平屋・平入り

写真-2 「玄関」型・平屋・平入り形式

図-4 平入り大屋根形式のノボリ梁構造と“ドマ”部分の関係

あるものの、構造的には明らかに下屋であることが分かる。なお、主屋の妻入り、平入りを問わず、ナガシの上部は天井が張られず、下から直接小屋組を見上げることのできる吹き抜けの空間となっている。ナガシにおける煙や湿気、匂いなどに配慮した空間形態であるが、同時に平入りの場合も、ナガシは大屋根下に含まれてはいるものの、妻入りの下屋の場合と質的には全く変わらない空間内容・形態であることを示している。

なお、図-1, 3における住宅後部の1間の下屋底はエン(廊下)と土エンにかかるものである。

以上の関係は住宅が2階化した場合に端的に表現される。すなわち、妻入りの場合は図-5の立体図に示すように、主屋部だけが2階化し、前面下屋はそのままの形で残される。なお、この段階で、2階の切妻屋根下の破風面を貫と束を格子状に組み真壁風にみせる独特の意匠^{注6)}が現れる(写真-3参照)。この意匠はかつて前田藩における板葺きの武家住宅にみられたものであり、それが2階化の段階で破風面が大きく目立つため、強く意識されるようになってきた結果を反映しているものと考えられる。

一方、平入りの場合も図-6の立体図に示すように、元来の“ドマ”部分が妻入りの場合と同様に下屋となり、居住室部分のみ2階建てとなる(写真-4参照)。

図-5 立体図・「玄関」型 2階建て・妻入り

写真-3 「玄関」型・2階建て・妻入り下屋形式

図—6 立体図・「玄関」型 2階建て・平入り

写真—4 明治後期の典型的な「玄関」型・2階建て・平入り下屋形式

しかしながら、上記図—5, 6のように前部下屋が張り出した状態で2階化するものは実際はきわめて少数である。すなわち、前稿までに示してきたように2階建ての成立は同時に「玄関後退」型の成立と言ってよく、「玄関後退」型は本稿の定義上、玄関を主屋内部に半間喰い込ませる形（図—2, 右図参照）で後退させるとともに、「2・2・2」構成や「2・2・1」構成の場合はナガシ形状を間口×奥行きを2.0×1.5間から1.5×2.0間に形状変化し、主屋前面部に張り出させるものであった。これを屋根架構の面からみれば、下屋という形態はなじまない。2間に張り出したナガシを下屋で架構すればその先端部の天井高は低いものになってしまう。また、天井高を確保しつつ図—5, 6の模式図に示す下屋形態をとると、その立上がりによって2階前面の壁面を塞いでいき、2階窓を前面に設ける場合には、室内側からは腰高になるとともに窓せいは低いものとなる。事実、「玄関」型で2階の場合、2階前面に窓を設けず、側面に設ける（隣家との関係において採光・プライバシーなど不利である）ものも認められる。

これを解決する手段として「ツノヤ^{注7)}」形式が採用された。図—7に示すようにナガシはツノヤとして突き出す形態をとっており、これによってナガシ前面部の天

図—7 立体図・「玄関後退」型 2階建て・妻入り

井高が低くなる問題や2階前面の窓開口問題は解消される。

このナガシ部をツノヤとして突き出す手法は北陸地方、とりわけ滋賀県湖北地方から福井県、石川県にかけての全国でも唯一の前ドマ農家住宅地帯においてとくに発達してきた形式であり^{注8)}、当時としても珍しい手法ではなかった。したがって、同じ前ドマ形式である「玄関」型の発展過程において、従来の下屋形式に代わってこのツノヤ形式を採用入れたとしてもなんら不思議はないのであるが、結果としてナガシ部は構造上、主屋部とは完全に独立となり、平面構成上の自由度を飛躍的に獲得することとなった。そのことが「玄関後退」型という新しい都市住宅形式の成立・発展を大きく担保してきたといえよう。

2. ゲンカン部およびナガシ部の屋根形式

本節では、改めてゲンカン部およびナガシ部の屋根形式を取り挙げる。

表—2に示すように、ゲンカン部の屋根形式は明治前期においては下屋形式（下屋からさらに突き出す形で玄関庇の付く場合—写真—1参照—がほとんどであるが、

表—2 ゲンカン部の屋根形式（「前部台所」系）

	平入 大屋根	下 屋	入 母 屋	切 妻	庇	計
明治前期	7 41.2	9 52.9		1 5.9		17
明治後期	2 10.0	10 50.0	3 15.0	1 5.0	4 20.0	20
大正期	1 2.9	16 45.7	12 34.3	3 8.6	3 8.6	35
昭和戦前期		40 46.5	39 45.3	2 2.3	5 5.8	86
計	10	75	54	6	13	158

注) 分類不能を除く。

表—3 ゲンカン部の屋根形式（「前部台所」系）

住宅間口		2間	2.5間	3間	3.5間	4間	4.5間	計
住宅型	屋根形式	平入 大屋根	入下 母屋	切妻 庇	平入 大屋根	入下 母屋	切妻 庇	
玄関 型	明治前期		1	1	1 1	2 2	2 3	13
	明治後期		1	2	1 1 1 1 3		2	13
	大正期		1 1	3 1	2	1 1	1 1 1	14
	昭和戦前期	1	4 3	3 3	3	2	1	20
	計	1	7 4	9 4	1 6 1 1 1 3 6 3	1 3 5 2	2	60
玄関 後退 型	明治前期		1	1			1	4
	明治後期					1 1	1 1 1 1	7
	大正期		4 1 3	2	1 1 2	2 2	3	21
	昭和戦前期		13 4 1 1	8 6 1 1	4 6 2	4 10	4	66
	計		18 5 4 1	110 6 1 2	1 5 8 2	7 13	2 1 1 8	98
合 計		1	25 9 4 1	119 10 1 3	2 11 9 1 3	3 13 16	3 4 6 10	4 158

(注) 分類不能を除く。

写真—5 「玄関後退」型の玄関入母屋屋根

これを表—2, 3において「下屋形式」としている。表—2, 3における「庇」は主屋から直接玄関庇として突き出す場合を指している。)が最も多く半数以上を占めている。図—1に示した形態である。平入大屋根形式も41.2%を占めるが、これは、図—3(写真—2参照)に示した形態となる。明治後期になると主屋が2階建て化することによって平入大屋根形式はなくなるが、下屋形式(図—5, 6 写真—3, 4参照)はやはり半数を占めている。

大正期でも下屋形式が45.7%と最も多いが、注目されるのは入母屋形式(写真—5)の増加である。このゲンカン部の入母屋形式は既に明治後期にも認められるが、大正期には急速に普及しはじめ、34.3%を示している。さらに、昭和戦前期になると、入母屋形式は45.3%に増加し、これに切妻形式の玄関を加えると下屋形式を超えるようになる。これを間口別(表—3)にみると、ゲンカン部の入母屋形式は住宅間口の大きい住宅ほど多く普及しており、とくに大正期の「玄関後退」型では3.5間間口以上の場合に7/10=70%, 昭和戦前期では20/31=65%を占めている。

以上のように、ゲンカン部の屋根形式は、明治期においては素朴な下屋形式であったのに対し、2階化の過程でゲンカン部の格式意匠性に工夫が凝らされ、次第に入母屋形式が増加し、かつ主流を占めるようになってきた状況を読み取ることができる。

次に、ナガシ部の屋根形式を同様に表—4から読み取ると、明治前期では、下屋形式(図—1)および平入大屋根(図—3)ともに43.8%を示している。ゲンカン部の場合と大差はなく、ゲンカン部とナガシ部が一体的な構造のもとに設けられていたことによる。

明治後期では2階建て化に伴い、下屋形式が圧倒的に多くなり約7割を占めている。

大正期になると「玄関後退」型の増加に伴いナガシ部がツノヤとして突き出すために、切妻形式(図—7, 写真—6)が最も多くなり半数近くを占めるようになる。

表—4 ナガシ部の屋根形式（「前部台所」系）

	平入 大屋根	下 屋	切妻 妻	寄せ 棟	その他	計
明治前期	7 43.8	7 43.8	1 6.3	1 6.3		16
明治後期	1 6.3	11 68.8	2 12.5	2 12.5		16
大正期	1 3.0	10 30.3	15 45.5	3 9.1	4 12.1	33
昭和戦前期		31 36.5	34 40.0	15 17.6	5 5.9	85
計	9	59	52	21	9	150

(注) 分類不能を除く。

写真—6 大正期における典型的な「玄関後退」型・主屋切妻・ゲンカン下屋・ナガシ切妻屋根の住宅

下屋形式(写真—3参照)は30.3%に減少する。

昭和戦前期では、切妻形式が40.0%となるが、寄せ棟形式(写真—7)の17.6%を加えるとツノヤ形式は57.6%となる。この寄せ棟形式は明治後期にも2件認められるが急速に普及するのは昭和戦前期である。

この内容をさらに詳しくみたのが表—5である。「玄関」型の場合はほとんどすべてが平入りあるいは妻入り

表—5 ナガシ部の屋根形式（「前部台所」系）

住宅型	住宅間口 屋根形式	2 間		2.5 間		3 間		3.5 間		4 間		4.5 間		計
		平入 大屋根	寄下切 妻の棟他	平入 大屋根	寄下切 妻の棟他	平入 大屋根	寄下切 妻の棟他	平入 大屋根	寄下切 妻の棟他	平入 大屋根	寄下切 妻の棟他	平入 大屋根	寄下切 妻の棟他	
玄関 型	明治前期		1			1	1			2	1	2	4	12
	明治後期		1		2		2		1	3		2		11
	大正期		2		4		2		1	1	1	1		12
	昭和戦前期	1	6	1	5	1	3		2			1		20
	計	1	10	1	11	1	1	8	3	7	1	3	7	55
玄関 後退 型	明治前期		1	1		1				1				4
	明治後期								1	1	1	1	1	5
	大正期		1	4	2	1	1	1	3	3	1	3		21
	昭和戦前期		7	5	8	1	3	6	4	2	1	9	1	65
	計		8	9	11	2	1	3	7	5	3	1	11	95
合 計		1	18	10	11	2	1	14	7	5	4	2	9	150

注) 分類不能を除く。

写真—7 ナガシ部の寄せ棟形式

いずれかの主屋に付属する下屋形式である。これに対し「玄関後退」型ではほとんどすべてがツノヤとして張り出すが、その形式は3.5間間口以上の場合、大正期では $9/10=90\%$ 、昭和戦前期では $22/29=76\%$ と圧倒的に切妻が多い。一方、小間口住宅が増加する昭和戦前期の3間間口以下に注目すると寄せ棟形式（12戸）が切妻形式（11戸）と肩を並べるようになる。さらに、より小間口の2.5間間口に注目するとむしろ寄せ棟形式の方が多くなる。なお、2.5間間口程度の小間口住宅では寄せ棟に分類したが実際は片流れ形式でかつ寄せ棟（写真—8）のことが多い。このように小間口ほどナガシ屋根の形状が寄せ棟となるのはその間口幅が狭くなった（1.5間以下）場合の屋根形状（とくに破風面）の貧相さを補おうとする意匠意識によるものと考えられる。

以上のように、ナガシ部の屋根形式は、「玄関」型では下屋形式が一般的であったが、大正期以降、「玄関後退」型ではツノヤとなり、その形式は切妻を主とし、間口の小さいナガシ屋根では寄せ棟形式が現れてきた。

3. 住宅の外観における変容過程・要約

以上、1, 2節の結果を総合して、住宅の外観面からみた住宅様式の変容過程を要約する。

旧武士居住地における住宅様式は、明治前期における妻入りあるいは平入り平屋建て直家形式の「玄関」型か

写真—8 ナガシ部の片流れ寄せ棟形式

ら出発し、2階化することによって「玄関後退」型が発生する。

その初期段階は主屋屋根は2階建て妻入り（切妻）であるがとくに3間間口以下の小間口住宅では平入りも多く存在した。また、この段階では玄関は下屋であり、ナガシはツノヤ形式の切妻屋根であった。この初期段階の「玄関後退」型はとくに2階切妻破風面を束と貫を格子状に組む「アズマダチ」とする素朴で美しい外観によって特徴づけられる。

その後、昭和期に入ると主屋屋根は次第に妻入りが主流を占めるようになるとともにその屋根形状は入母屋屋根が増加し、玄関も入母屋に変化する。

この過程を写真で示すと、前出の写真—1, 2の段階から、写真—3を経て、写真—6の段階で「玄関後退」型が成立する。そして最終的には写真—9となって「玄関後退」型は外観様式の面でも完成する。この段階では主屋入母屋屋根の下に2階の窓が出窓風に張り出し、かつての束と貫による「アズマダチ」の素朴な意匠は消えるが、一方、玄関も入母屋の「威風」を備えた意匠が出現する。

また一連の本研究では直接の分析対象とはしてこなかったが、もともと下級武士階級住宅であった「玄関」型の時期からこれら住宅はすべて門構えを有していた。それが、写真—1, 2から写真—3を経て、写真—6, 写真—9となるに従い前面道路境界線に接する塀や門構えは次第に格式性を備えたものに変容してきたことを示唆している^{註9)}。

要するに、住宅の外観からみた住宅様式の変容過程は、一言で要約すれば「格式化」の過程であった。それを支えてきたのは、明治後期から勃興する（地方都市においては）官吏などに代表される都市「中流階層」^{註10)}の住居観であった。

写真—9 昭和戦前期の典型的な外観をもつ「玄関後退」型・主屋入母屋・ゲンカン入母屋・ナガシ切妻屋根の住宅

補遺. 前部台所系住宅^(註1)における昭和戦前期までのザシキの位置付けと就寝状況

一連の本研究は実態調査に基づく資料をもとに、一貫して住宅の「物的」側面に限定して論考を進めてきた。そこでの最も基本的な論理の一つは、「玄関後退」型を成立させた要因は「正式」のザシキを確保するための住宅の2階化にあった、ということであった。本節ではこの考察を補強するために、戦前住宅について主として就寝と接客面から若干の「住まい方」調査を行った結果を「補遺」として報告し、ひとまず一連の本研究を閉じることとしたい。

用いた資料は、戦前および戦後の住まい方を知るために行った平成元年10月～12月の居住者ヒアリング調査の結果である。調査対象は前部台所系の既採取平面189戸から無作為に抽出した120戸であり、このうち調査が可能であった世帯は70世帯であった。さらに、戦前から居住している世帯は28世帯(40%)であったが、当時の状況(主に戦前期)を把握できたものは22世帯であった。

このようにサンプル数が限られているので事例報告としての域を出るものではないが、それでも一定の傾向が認められ、住まい方における当時の状況を読み取ることができる。

はじめに、ヒアリング結果のうち代表的な例を挙げる。

前々稿(No.5)平面図—16に示した「玄関後退」型・「2・2・2構成」の住宅は建設時期は「明治後期」であるが、現居住者が住みはじめたのは昭和13年であった。当時の居住者は夫婦のみであり、1階のザシキで就寝した。ここには、簡単なトコ、仏壇、エンが備わり、半間の押入も設けられている。接客は1階ザシキでも行われ

たが、正式には普段は空き室であった2階のザシキが使用された。

戦後間もなくの、最も家族人数が多い時には、長男が2階の洋間、その隣室の4.5畳が長女の寝室に当てられ、幼い二女、二男は夫婦とともに、1階のザシキおよびイマ(ナンド)で適宜就寝した。

図—8の「玄関」型・「2・2・2構成」の住宅は、大正14年に建設された。建設当初は、夫婦および女子4人が、1階のザシキとナンドにわたって就寝していた。男子は2階の6畳に長男(19歳)が、4畳に次男(9歳)がそれぞれ1室与えられて就寝していた。

2階のザシキは主ザシキとして空き室であった。

図—8 「玄関」型・「2・2・2構成」(大正期)

図-9の「玄関後退」型・「2・1・1B構成」の住宅は昭和4年に建設された。当初は、老夫人（若夫人に対して）とその子供である女子3人の計4人が1階ブツマで集中就寝し、若夫婦は2階の後部4.5畳で就寝した。客の動線は、ゲンカン、ゲンカンノマ、階段、2階ゼンシツ、主ザシキの順となる。主ザシキは前部に位置して6畳と小規模であるが、1.5間のトコにエンを備えている。

図-10の「玄関」型・「2・1・1B構成」の住宅は昭和4年に建設された。戦前は、老夫婦（若夫婦に対しての意）が1階ザシキで就寝し、若夫婦は2階の前部6畳で就寝した。客の動線は、前図と同様、ゲンカン、ゲンカンノマ、階段、2階ゼンシツ、主ザシキの順となる。

図-9 「玄関後退」型・「2・1・1B構成」(昭和戦前期)

図-10 「玄関」型・「2・1・1B構成」(昭和戦前期)

主ザシキは、10畳の規模をもち、2間のトコにエンを備えている。

戦後間もなくの時期に、老夫婦、若夫婦とも夫が亡くなっており、この夫人2人と若夫婦の長女（当時17歳）が1階ザシキで就寝した。2階は前部の6畳に長男、3畳に二男が就寝した。主ザシキおよびゼンシツは、空き室とされていた。

次にサンプル全体から読み取れた内容を述べると、まず、2階のザシキは主ザシキであることから、ここが寝室に専用あるいは兼用されることはなかった。

これに対し、1階のザシキはブツマを兼ねており、「2・2・2構成」では半数以上が寝室としては使用していない。寝室に使用しない住宅では比較的、日常の接客（特別の行事等ではないという意味）に使用していた。しかし一方、1階ザシキは隣室にナンドがあるにもかかわらず、主寝室として使用する場合も相当数認められる。1階ザシキは、トコ、エンを備えている。そのため主人室としての格付けを重んじる家庭では、主人を中心とする寝室として使用されていた。なお、子供が幼い場合は、1階ザシキに限らず親である夫婦とともに就寝するし、隣室のナンドと合わせて主人夫婦と子供たちが就寝するものも、この範疇に含めている。

ナンドは、本来の性格から寝室として使われるが、1階ザシキとナンドは襖で仕切られているだけなので、たとえば老夫婦と若夫婦が隣り合わせに就寝することは原則としてない。言い換えれば、1階ザシキあるいはナンドは、原則的にはどちらか一方だけが寝室として使用されることになる。ナンドが寝室として使われる場合、その使用者は主人夫婦か老人（女性）であるが、その他女子を中心とする集中就寝の場所にもあてられた。

2階の（主ザシキ以外の）居室を寝室に使用することも、ほとんどの場合に認められる。使用者は若夫婦か子供いづれかであり、主人夫婦あるいは老人が使用することはなかった。子供の場合、2階の対象は男子が多い。男子に一人1室が与えられている場合もまれに認められるが、その場合でも女子は1階に集中就寝している。

「2・2・1構成」および「2・1・1構成」では、1階奥の間がザシキ兼ナンドであるため、ここに、主人夫婦、あるいは老人や幼い子供が就寝せざるを得ない。一般に、室数にゆとりがない限り集中就寝であり、とくに子供の場合はそうである。「2・2・1構成」や「2・1・1構成」では1階ザシキがナンドを兼ねるので、ここに姑、嫁、成人に近い女子が集中就寝していたケースや、成人男子でさえ嫁が来るまで親夫婦と集中就寝していたケースも採取されている。なお、夫婦、子供9人の合計11人家族が同時期に居住した例があり、当然集中就寝の程度も厳しかったことが想像されるが、この場合でも2階ザシキは空き室とされていた。

また、戦前の住まい方を採取した22例中、チャノマを就寝場所としている例は1例も存在しなかった。かつて西山卯三が示した食寝分離の原則は、金沢の「中流住宅」においてもあてはまっていたことを示している。

以上のように、明治後期から2階建て化が始まったのは、仏間を兼ねた半ば私的な1階の「ザシキ」ではなく、2階に「正式」の座敷を構えるためであったことが確認される。

結 語

以上、一連の本研究を通して、旧下級武士居住地における「玄関」型住宅を祖型として、明治後期以降、「玄関後退」型住宅が成立してきたこと、および、その成立・変容の過程と要因を検討してきた。

稿を結ぶにあたり、改めて本研究の意義を要約すると以下ようになるであろう。

1. 地方都市における都市「中流住宅」系譜の発掘

これまでも既に、我が国中産階級住宅の源流は、旧武士階級住宅にあると指摘されてきた¹²⁾。しかしながら、その源流から都市中流住宅の成立に至る過程を実証的に論じたものは見当たらないといえよう¹³⁾。

一方、旧下級武士住宅を対象とする優れた研究もいくつか存在している¹⁴⁾。しかしながら、それらの多くは建築歴史学の視点から藩政期における住宅の考証それ自体を直接の目的としており、現代住宅につながる系譜として、その発展過程を実証的・系統的に論じたものはない。

この点において、本論は金沢という日本の代表的な地方都市を対象として、旧下級武士階級の住宅から現代住宅につながる都市住宅の系譜を抽出・考証したことに第1の意義が見いだせられると思われる。

また、日本における明治以降の住宅の歴史は、かの幸田露伴の主張¹⁵⁾を実証するかのごとく、一面専用住宅化の歴史でもあった。その視座からみれば、本研究は、農業あるいは商業併用住宅に対置する、専用住宅系都市住宅の系譜を発掘してきたことになる。

さらに、この旧下級武士住宅を祖型とする専用住宅は、いわゆるトオリニワを持ち後部台所系である町家系住宅に対置する、前部台所系住宅として、都市住宅の二大潮流の一つを構成していたことを考証した。

2. 接客・格式空間の優先

この旧下級武士階級に起源をもつ都市型住宅は、下級といえども武士階級の住宅であっただけに、接客・格式空間を優先していた。祖型としての「玄関」型はゲンカン、ゲンカンノマ(小間)、ザシキの接客・格式空間列と、ナガシ、チャノマ、ナンドの生活空間列、すなわち、いわゆる「ハレ」と「ケ」の空間列を峻別しており、かつ「ハレ」空間を主体に構成しているところに特徴がある。

ところで、明治以降の日本の指導層を形成したのは旧中・下級武士階級出身者であった。さらに横山俊夫が提出し、梅棹忠夫¹⁶⁾が敷衍したように、日本の近代化(シビリゼーション)過程は武士(サムライ)文化の大衆化(サムライゼーション)過程でもあった。とすれば、日本の近代化過程において当時勃興しつつあった「中流階層」を対象とする専用住宅の変容過程は、接客・格式空間確保に腐心した歴史でもあったはずである。したがって、明治以降、「玄関」型から「玄関後退」型に変容していく直接の動機が、2階に「正式」の接客・格式空間としてのザシキを確保することにあったことは、この歴史的文脈の中では必然的な結果であった。さらに、屋根形式における切妻から入母屋化、あるいは玄関の入母屋化、門構えの充実等も、体面や格式を重んじるサムライ文化の直系の末裔としての都市中流階層にとっては当然の帰結であった。

このように考えると、旧下級武士階級住宅を祖型とする住宅系の住宅平面形式および住宅(外観)様式の成立と変容過程は、日本の近代社会成立期における都市中流階層の生活と思想をまさに象徴するものであったといえよう。

3. 間口と住宅型の関係

本研究の第3の意義は、現実には決定的な意味を持ち、その重要性については自明であるにもかかわらず(あるがゆえに)研究的には注目されることの少なかった宅地間口および住宅間口に着目してきたことである。

宅地間口および住宅間口は明治以降、狭小化の過程をたどってきたことを示したが、その過程こそが「玄関」型から「玄関後退」型を産み出すもうひとつの大きな動機であった。間口の縮小化にもかかわらず、2階化によって「ザシキ」空間を確保する一方で、ナンド、チャノマ、ナガシの生活空間を温存・確保(その結果、住宅規模の拡大)しようとする住要求の過程がナガシの前面への張り出しと屋根形状の下屋からツノヤへの変化を産み出した。

さらに「玄関後退」型において間口別に住宅型「構成」が明瞭に定式化できることを示すことによって、とくに都市住宅の場合、住宅型および住宅型「構成」は宅地(住宅)間口に規定されて成立、変容してきたことを論証した。この結果を敷衍すれば、住宅型や住宅平面構成等の検討に際しては、これまでの「列構成」などの視点に加えて、住宅間口の検討が重要な視座であることを改めて示したことになる。

4. 民衆の民衆による民衆のための建築

「玄関」型から「玄関後退」型への変容、および間口別の「玄関後退」型各構成の成立の動機とその変容過程を整理してきた。言いかえれば、当時の社会的・経済的外部条件と居住者の価値観に基づく住要求に対応して新

しい都市住宅型が成立してきた過程を整理してきたことになるが、それは一面、時代に対応する居住者の創意工夫という、民衆の巧まざる智恵の過程を検証することでもあった。明治初期から数えても、昭和戦前期まで約80年程度の期間において、一たび状況が変化すれば、一人の建築家や計画家が介在することもなく、すなわち、江戸時代の庶民住宅について露伴が指摘したように、自らの階層に適わしい住宅型を「何人の意匠によれるとも無く、次第々々改良を積みたる結果として殆ど一定の様式を成すに至」¹⁷⁾ ったし、成しうることの検証でもあった。その意味では、一連の本研究は、明治以降、昭和戦前期にかけての、日本の代表的な地方都市、金沢市において展開された、日本の「中流階層」の一つの見事な Architecture without Architects¹⁸⁾ の存在と、その産み出される過程への照射でもあった。

注

- 1) 文献1)~6)
- 2) 一連の本研究では資料を昭和戦前期までに限定しているのでこのように表現しているが、実際には高度経済成長期以降、旧市街地においても建て替えのはじまる昭和40年頃まで、旧市街地における代表的住宅型の一つであった。
- 3) 文献7), 8)
- 4) 文献9)
- 5) 北陸地方では、カヤ葺(サス組)から板葺、さらにカワラ葺に転換した後の小屋組は、農家、町家ともに和小屋組よりもノボリ梁構法が一般的であった。
- 6) この意匠は「玄関」型の平屋建てにもみられた(写真—1参照)。しかし平屋建ての場合は前面の下屋に遮られ、破風面も小さいため目立つことはなかった。一般に、福井県から富山県の北陸地方において、入母屋あるいは寄せ棟のカヤ葺から板葺あるいはカワラ葺の切妻屋根になった時、破風面はこの様式となった。この背景には全国でも唯一の妻入り地帯であることが関係しており、玄関正面の破風面への意匠意識が強く働いた結果とみることができよう。その意味では北陸地方における典型的な伝統的住宅意匠様式といえよう。
- しかし、この様式も後に述べる入母屋化の趨勢の中で消滅の方向にある。なお、この様式が最も発達した富山県礪波地方の農家住宅では、この様式を「アズマダチ」と呼んでいる(参考文献11)参照)。石川県の農家住宅では「アズマダテ」と呼称する地域もあるが、本稿で論じてきた都市住宅については、通常の呼称はないようであり、その呼称例を採集することはできなかった。
- 7) 民家学における統一用語として用いているが、北陸地方ではツノヤと呼ぶことはない。北陸地方ではカグラと呼ぶ場合が多い。
- 8) 文献10)参照。
- 9) 門構えや塀は階層性を示すステータス性の最も強いものであるから、厳密には階層を同定して比較しなければならない。したがって、ここではあくまでも推測の域を出るものではない。
- 10) 文献4), p.40参照。なお、文献12) p.45では「中流住

宅」に居住する(大部分の)階層を「新政府に出仕する官僚、大資本に依存する高級社員をはじめとして、技術者、医師、法律家、教育者、一部の軍人」と想定している。ただし、一連の本研究で展開している「中流住宅」はいずれも女中部屋をもたないことから明らかなように、木村博士が展開した「中廊下型住宅」(必ずといってよいほど女中部屋を備えていた)などに代表される「中流住宅」に比較して、一ランク下層の、つまり、より「庶民」階層に近い都市居住者の住む「中流住宅」であったとみるべきであろう。

- 11) 一連の本研究で論じてきた旧下級武士住宅を祖型とする「玄関」型およびその発展形態としての「玄関後退」型住宅はいずれも住宅前部に台所を持ち、後部に台所を持ついわゆる「トオリニワ」型の町家住宅とは対照をなしている(文献4), No.4参照)ので、ここでは「玄関」型と「玄関後退」型を総称して前部台所系住宅と表現している。
- 12) たとえば文献12) p.98。
- 13) 武士階級住宅から都市中流住宅が成立する過程を詳細に論じたのは、おそらく木村徳国博士をもって嚆矢とするであろう(その内容は氏の学位論文「日本近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する史的研究」に収められているがその骨子は文献12)にまとめられている)。しかし、この博士の優れた研究も中廊下型住宅の成立、ついで居間中心型住宅の成立という、二つの住宅様式の成立過程を様式史的に展開しているものであって、武士住宅からの系譜を直接的に論証・展開しているものではない。博士は「いまや中流住宅に変質しようとする在来和風住宅、北田氏のいう『以前旧体の日本宅』が江戸時代のいかなる流れをひくものであるかについては、現代のところ、江戸時代のさまざまな住宅が完全に明らかにされていないので明確に断言することができない」(文献12) p.98)として、直接的な系譜の展開を行っていない。
- なお、この木村博士の展開した中廊下住宅および居間中心型住宅の成立と展開について、総合的な再検討と新たな視点を提示したものに九州大学青木正夫博士(当時)を中心とする研究者グループの研究がある。この研究はきわめて示唆に富む優れたもの(その要旨は文献13)にまとめられている)であるが、本稿とは直接的には関係しないのでその論評は行わない。
- 14) たとえば文献14)。
- 15) 文献15) pp.92~94。
- 16) 文献16)
- 17) 文献15) p.85。なお、伊藤忠太はこのような発展形態を「進化主義」と名付けていた(伊藤忠太、「進化論」、建築雑誌323号、一青木正夫博士、文献13) p.13参照)。
- 18) 文献17)

参考文献

- 1) 玉置伸悟、近藤達男：歴史的既成市街地内居住地における宅地間口の収束性について —金沢市におけるケース・スタディー、日本建築学会論文報告集、第302号、pp.107~119、昭和56年4月
- 2) 玉置伸悟、近藤達男：歴史的既成市街地内居住地における住宅間口と住宅平面型の関係 —金沢市におけるケース・スタディー No.2—、日本建築学会論文報告集、第317号、pp.105~115、昭和57年7月

- 3) 玉置伸悟, 近藤達男: 歴史的既成市街地内居住地における住宅型と設備空間の関係 —金沢市におけるケース・スタディ No. 3—, 日本建築学会論文報告集, 第 336 号, pp. 100~111, 昭和 59 年 2 月
- 4) 増田達男, 玉置伸悟: 残存住宅調査からみた旧武士居住地における明治以降の住宅平面型の変容に関する研究 —金沢市におけるケース・スタディ No. 4—, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 403 号, pp. 33~42, 1989 年 9 月
- 5) 増田達男, 玉置伸悟: 旧武士居住地における明治以降の住宅平面型の特徴とその変容に関する研究 —金沢市におけるケース・スタディ No. 5—, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 409 号, pp. 95~107, 1990 年 3 月
- 6) 玉置伸悟, 増田達男: 「玄関後退」型住宅の成立と変容過程に関する研究 —金沢市におけるケース・スタディ No. 6—, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 413 号, pp. 49~60, 1990 年 7 月
- 7) 島村 昇, 増田達男ほか: 金沢における武士住宅の研究・その 1 —武士住宅における諸空間の特徴—, 日本建築学会北陸支部研究報告集, 第 32 号, pp. 241~244, 平成元年 6 月
- 8) 島村 昇, 増田達男ほか: 金沢における武士住宅の研究・その 2 —武士住宅の平面構成について—, 日本建築学会北陸支部研究報告集, 第 32 号, pp. 245~248, 平成元年 6 月
- 9) 島村 昇, 増田達男ほか: 金沢における武士住宅に関する研究・その 2 —平面分析による足輕住宅の居住空間—, 日本建築学会北陸支部研究報告集, 第 31 号, pp. 215~218, 昭和 63 年 6 月
- 10) 玉置伸悟ほか: 北陸地方における農家住宅の変容過程に関する研究 (その 1) —福井県嶺北地方における農家住宅に関する研究—, 財団法人新住宅建築研究所報, No. 11, pp. 113~132, 1984
- 11) 玉置伸悟ほか: 北陸地方における農家住宅の変容過程に関する研究 (その 2) —富山県における農家住宅に関する研究—, 財団法人新住宅建築研究所報, No. 12, pp. 151~168, 1985
- 12) 木村徳国: 明治時代の都市住宅—中産階級住宅の発生と中廊下形住宅様式の成立—, 太田博太郎編『近代住宅史』, 雄山閣出版, 昭和 44 年 5 月
- 13) 青木正夫: 明治以降の住様式の変化・発展に関する考察, 財団法人住宅建築研究所報, No. 12, pp. 13~61, 1985
- 14) 大河直躬: 江戸時代の中・下級武士住居と近代都市住居, 『日本建築の特質—太田博太郎還暦記念論文集』所収, pp. 418~456, 中央公論美術出版, 昭和 51 年 10 月
- 15) 幸田露伴: 露伴全集 第 9 巻, 蝸牛会編, 岩波書店, 昭和 29 年 12 月
- 16) 梅棹忠夫, 石毛直道編: 『近代日本の文明学』, 中央公論社, pp. 96~97, pp. 158~161, 昭和 59 年 5 月
- 17) Rudofsky Bernard: ARCHITECTURE WITHOUT ARCHITECTS, U.S.A. Connecticut Printers, Inc. 1964

(1990 年 7 月 10 日原稿受理, 1990 年 11 月 7 日採用決定)